

GREEN PORT

グリーンポート・レポート

REPORT

2026
7月号

特集

新たにエアポートシティの
名称が決定

SORATO
NRT

FOCUS ON!

- ・SHIKISAI GARDEN -Seasonal colors-
- ・SKYTRAX社の世界空港評価
- ・共創アート作品「空のれん/SORA-NOREN」

NRT APPROACH

5期連続の増収
2025年度 NAAグループ連結決算概要

先生に伺いました

城西国際大学 経営情報学部 七井 誠一郎 教授

協働の現場を訪ねる

株式会社KIDS HOLDINGS×
NAA プロジェクトオーナー制度 フードラボNRT



『GREEN PORT REPORT』は、WEBでもご覧いただけます。

<https://www.narita-airport.jp/ja/company/media-center/publications-pamphlets/greenport/>

新たにエアポートシティの名称が決定

「SORATO NRT」

ソラト

ナリタ



SORATO NRT
WEBサイト

空港間競争に勝ち抜く 新しい空港都市圏の誕生へ

エアポートシティの名称については、未永く親しんでいただける名称の一般公募を行い、専門家の知見を取り入れながら検討を進めてきた。決定した「SORATO NRT」は、熾烈な世界の空港間競争を勝ち抜く、新しい空港都市圏の誕生を示すため、“空の都”を意味する「SORATO」に、空港周辺の市町の結束を示す「NRT」を組み合わせたものだ。

SORATO NRTのロゴデザインのシンボルは「Sky Oval(スカイオーバル)」。

この空に浮かぶ楕円は、飛行機の窓をモチーフに生まれた。離陸するたびに誰もが目にする窓からの光景は、見知らぬ世界や新たな未来への入り口であり、楕円は生命が殻を破る瞬間、すなわちインキュベーションの形でもある。未来の産業や人材が、この場所から生まれ羽ばたいていくというSORATO NRTの理念を示している。まだ見ぬ可能性を映し出し、新たな誕生を表す、SORATO NRTの新しいシンボルだ。

今後はエアポートシティ構想の理念を周知していくとともに、新たな産業や活力を生み出し、誰もが心豊かに暮らせる取り組みを加速させていく。



SORATO NRT 未来志向の空港都市圏創造フォーラム 2026

1月、NAA・千葉県・日経BP総合研究所がフォーラムを開催。同日、新しい空港都市圏の名称「SORATO NRT」を発表した。「成田空港第2の開港プロジェクト」による規模拡大を日本経済にどう生かすかを考えるため、講演のほか、経済戦略・国際競争力を有する産業集積・広域地域づくりの3テーマについてトークセッションを行うなど、有識者を交えて空港都市圏づくりが議論された。



フォーラム前のプレス向けブランド発表会にて、SORATO NRTのロゴを掲げる様子。

最新 の取り組み

民間事業者や教育・研究機関との連携強化

NRTエリアデザインセンターでは2025年11月にエアポートシティ構想の実現に必要な事項についてともに検討することを目的とし、京成電鉄株式会社と特別パートナーシップ協定を締結した。今後、両者でエアポートシティ構想の実現に向けた、空港と各拠点を結ぶ効率的な地域公共交通ネットワークの実現などの検討を進めていく。また、NAAは1月、エアポートシティ発展の核となるイノベーション・ハブ構築に向けて、東京大学先端科学技術研究センターと包括連携協定を締結した。今後、両者で共同研究や社会連携研究部門の設立、賛同企業との共創など、具体的な取り組みを推進していく。



東京大学先端科学技術研究センターとNAAで、航空を核とした産学官連携による研究開発基盤の構築などの取り組みを推進する。

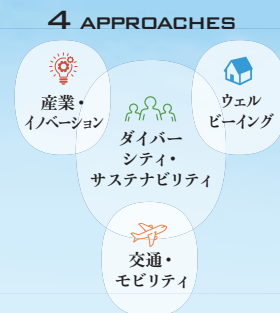
NAAでは現在、滑走路の新增設などを含む「成田空港第2の開港プロジェクト」を進めている。これを契機にNRTエリアデザインセンターが実現を目指しているのが、空港と地域が一体となったエアポートシティだ。その名称が1月に「SORATO NRT(ソラト ナリタ)」に決定。名称の由来や目指すビジョン、最新の取り組みなどを紹介する。

複雑化する世界と 地域の課題に対応していく

「成田空港第2の開港プロジェクト」と並行しながら、エアポートシティ構想では複雑化する世界と地域の課題解決も目指していく。人口増大やグローバル化の進展、国際秩序の不安定性といった世界的な課題をはじめ、産業の国際競争力の低下や人口減少・少子高齢化の進展、科学技術・イノベーション分野での相対的地位低下といった国内の課題、さらに空港周辺地域におけるポテンシャルの未活用や空港周辺道路交通網の未整備といった地域の課題。さまざまな課題に対応しながら、世界の成長を取り込み、日本経済の再活性化と地域の持続的な発展をけん引する。

4つのアプローチの融合でビジョンを実現

「フラッグシップ・エアポートシティ」のビジョンを実現するため、「産業・イノベーション」「ウェルビーイング」「交通・モビリティ」「ダイバーシティ・サステナビリティ」の4視点でアプローチする。これらが融合することで、国際競争力と持続可能性を兼ね備えた未来志向都市を目指す。



構想実現までの道のり

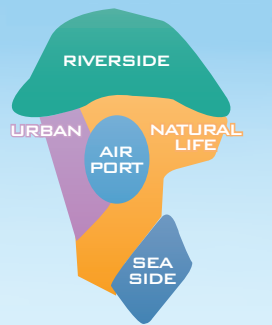
構想が実現するまで、さまざまな関係者・ステークホルダーの存在と合意形成を前提に、空港拡張や各種開発、インフラ整備、法制度、各種サービスの展開などを、中長期的な計画性をもって推進する。

誰もが輝き、世界と響き合う 「フラッグシップ・エアポートシティ」

エアポートシティ構想で目指すビジョンは、誰もが輝き、世界と響き合う「フラッグシップ・エアポートシティ」。成田空港が国際競争力を獲得するだけでなく、日本国全体の成長戦略を牽引し、海外での日本のプレゼンスを劇的に高めるのが狙いだ。そのためには世界情勢をとらえて世界の活力を取り込み、かつ成田空港拡張の機会をとらえて、日本・成田空港・周辺地域が本来有するポテンシャルを最大限発揮させる必要がある。その結果、世界で日本を輝かせ続ける「フラッグシップ・エアポートシティ」として生まれ変わらせ、日本・世界にそのシナジーを波及させる。

5つのエリアの連動で世界をリードする空港都市圏に

エアポートシティでは、5つのエリアが連動し世界をリードする空港都市圏の形成を目指す。そして、空港機能と周辺地域の調和や経済波及効果の最大化、広域連携による新産業圏を創出。ヒト、モノ、情報、資本が交錯するダイナミックな日本の成長エンジンとしての一翼を担う。



実行期	展開期	定着・持続期
・産業拠点形成の段階的実行 ・企業誘致とマッチング推進 ・交通整備	・産業拠点形成の完了・本格稼働 ・周辺まちづくりの進展 ・効果発現のフォローアップ	・ゾーン・エリアの成熟 ・持続可能性の追求 ・将来変化への対応
2025～2030	2030～2040	2040～2050
2050～		

継続的取組
人材確保 / 住宅確保・住環境整備
地域交流の利便性拡大(実証実験・実装化) / 観光拠点形成
特区指定・規則緩和・制度導入
エリアマーケティング・民間連携・企業誘致
地域連携・エリアマネジメント

ダイバーシティ推進に向けたセミナーを開催

3月、NRTエリアデザインセンターは「SORATO NRT ダイバーシティ推進セミナー2026」を開催。エアポートシティ構想で目指す「誰もがその人らしく生き、分かり合える地域社会の実現」や年齢、国籍を超え、多様な人が活躍できる「ダイバーシティ」な地域づくりに向け、先進的な取り組み事例の共有や、持続可能なまちづくりのあり方を議論した。



セミナーでは有識者による講演やパネルディスカッションなども実施された。

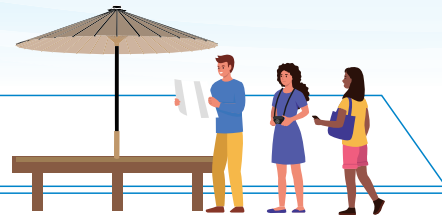


取り組みを推進する
NRTエリア
デザインセンターとは？

NRTエリアデザインセンターは、「成田空港第2の開港プロジェクト」による効果を周辺地域にも最大限波及させることを目的に、千葉県とNAAが2025年4月に開設。エアポートシティ構想を実現させることで、国際的な産業拠点の形成をはじめ、航空需要のさらなる創出と、我が国の経済の発展、国際競争力の強化にも貢献していく。

FOCUS ON! 1

SHIKISAI GARDEN -Seasonal colors-



第1ターミナル5階エリアがリニューアルオープン！ 豊かな水と四季の移ろいから日本情緒を体験

4月9日、第1ターミナル5階エリアが「SHIKISAI GARDEN -Seasonal colors-」としてリニューアルオープンした。ここは「日本の文化と精神性を育む豊かな水と四季の移ろい」をテーマにデザインされたエリアで、水の流れや四季を通して日本を感じながらゆったりと過ごすことができる。

広大なエリアをつなぐ要素は「水の流れ」と「四季」。展望デッキで湧き出た水が館内を流れ、階下に落ちて流れていく様子をエリア全体で表現し、各所において四季を体感できる

エリアとなっている。エリア内では足湯やマウンテンデッキ（高台）から航空機の離着陸を間近で見られるほか、竹アートや竹林をモチーフにしたデジタルアートが楽しめたり、畳や和傘などを使ったリラックススペースで静かに過ごせたりと、飛行機を利用しない方でも気軽に立ち寄って楽しめる施設になっている。

今後も成田空港では、「滞在を愉しむ」という新たな価値を提供し、お客さまの利便性・快適性の向上を図っていく。



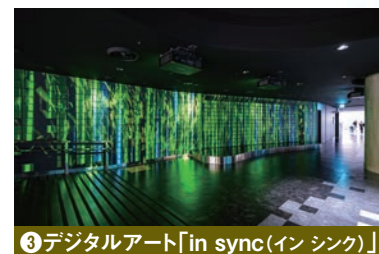
④ キッズエリア

株式会社フレーベル館が運営する有料キッズパーク「フレーベル館 Kinder Platz(キンダープラッツ)」など、子ども連れのお客さまが楽しめるエリア。



⑥ 展望デッキ「GARDEN WALK」

水のせせらぎや緑に囲まれながら、航空機の離着陸を間近に眺めることができる。また、四季の香りを愉しむことができる足湯や、高さのあるマウンテンデッキからの眺望など、思い思いの時間を満喫することができる。



③ デジタルアート「in sync(イン シンク)」

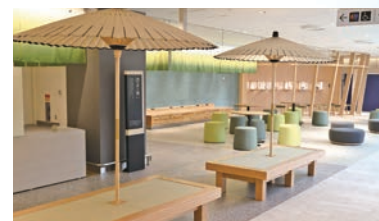
竹林をモチーフとした、光と流れが移ろうアート空間。人に呼応して音が響き、光と影が移ろい、視差による奥行きと変化を生み出す。

SHIKISAI GARDEN -Seasonal colors-



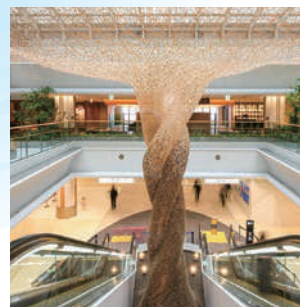
⑤ フードコート

「四季の彩りテラス」をテーマに、春、夏、秋、冬の4色の柱がアクセントとなり、食事の場を鮮やかに彩る。



② リラックスエリア 「茶の間」「居の間」「書の間」

それぞれの「間」にあわせた多様なシーティングが設置された静かな空間。日本を感じながら出発までの時間をゆったりと過ごせる。



① エントランス・吹抜け部(4階)

四代 田辺竹雲斎氏による竹アート「空の環(リング)」は、展望デッキから空間全体へと流れ出すエネルギーや水の循環を表現。



このプロジェクトは、日本の表玄関であり、豊かな自然に囲まれた「成田空港ならではの」コンセプトづくりから始まりました。コンセプトに沿って設計担当が細部までこだわって設計したこのエリアは、多様なお客さまが日本を感じながら思い思いに過ごせる滞在空間となっています。お子さま連れでも楽しめるエリアが増えたので、多くのお客さまに気軽に遊びに来ていただきたいです。

NAA 旅客ターミナル部 大河原 啓さん

FOCUS ON! 2

SKYTRAX社の世界空港評価



世界最高水準「5スターエアポート」3年連続で獲得！～World Airport Star Rating～

2025年11月、イギリスを拠点に世界の航空業界の格付を行うSKYTRAX社が実施する空港格付評価「World Airport Star Rating」において、最高評価となる5スター評価を3年連続で獲得した。本評価は、SKYTRAX社の監査員が空港の施設やサービスなどを網羅的に監査し、各カテゴリおよび総合評価について1～5つ星のいずれかで格付けするもので、2025年は特に、飲食・物販施設の拡充、新たな空港内滞在環境の整備、文化・芸術要素を含んだ雰囲気づくり、世界最高水準の清掃品質、空港スタッフの対応などが高い評価を受けた。



「空港スタッフ部門」世界一を獲得！～World Airport Awards 2026～

2026年3月、同じくSKYTRAX社が実施した国際空港評価「World Airport Awards 2026」において総合評価で世界5位、部門別では「World's Best Airport Staff」部門で世界1位を獲得した。本評価は、世界中の空港を対象にした顧客満足度調査の結果に基づいて算出されるもので、空港内で旅客と接するスタッフのサービスやプロフェッショナルな対応が総合的に高く評価された。成田空港が「空港スタッフ部門」で世界一を獲得したのは2019年・2024年に続き3度目となった。



- | | |
|----------|--------------|
| 1 チャンギ空港 | 6 シャルルドゴール空港 |
| 2 仁川空港 | 7 フィウミチーノ空港 |
| 3 羽田空港 | 8 イスタンブール空港 |
| 4 香港空港 | 9 ミュンヘン空港 |
| 5 成田空港 | 10 バンクーバー空港 |

FOCUS ON! 3

共創アート作品「空のれん/SORA-NOREN」



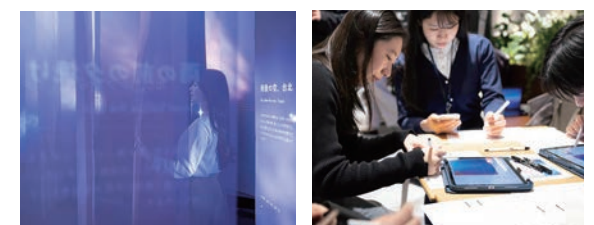
空港スタッフの想いをかたちにしてEX/CX向上

3月23日～5月10日まで、第1ターミナル4階の南ウイング・北ウイング内に、空港を支える多種多様なスタッフ100人の想いや個性をかたちにしたアート作品「空のれん/SORA-NOREN」を展示した。空間を埋め尽くす100枚ののれんは、空港スタッフ一人ひとりが選んだ「思い出の空色」で染め上げられ、見る側はその思い出を追体験できる。これは約40,000人在籍する空港スタッフの「思い出の空色」を通じて、その情熱や想いを可視化する「40,000 SKY COLORS project」の一環として制作されたもの。成田空港の人手不足対策の取り組みの一つで、空港スタッフがアートを使って空港内で自分らしさを表現することで「自分も成田空港をつくる一員である」という実感と誇りの醸成、職種を超えた一体感の創出につなげていくことが狙いだ。

成田空港では、今後もこうした従業員満足度を向上させる取り組みを継続していくとともに、「成田空港ならではの」旅客体験価値の創出を目指す。



スタッフが選んだ100色の空色ののれんをエピソードとともに展示。日本の玄関口として機能する空港を、仕切りながらも人の往来を緩やかにつなぐ、巨大なのれんと捉え表現した。



3月23～27日には、空港スタッフ100人が選んだ100色の空色を使用して制作されたオリジナルネックストラップ5,000本が空港スタッフに配布された。

✈

成田空港の最新の取り組みを紹介する

NRT APPROACH

5期連続の増収

2025年度 NAAグループ連結決算概要

■ 民営化以降、過去最高の営業収益に

2025年度の航空取扱量は、引き続き旺盛なインバウンド需要の後押しもあり、好調に推移した。航空機発着回数は、アジア、北米路線を中心に新規就航・増便があったことから国際線発着回数は年度として過去最高となり、全体として25.4万回と好調に推移し、航空旅客数は、外国人旅客数が過去最高の2,410万人、日本人旅客数も緩やかに増加したことから、全体では歴代2位の水準に。また、国際航空貨物量も年間を通じて好調で、前年度を上回った。これらの結果、空港使用料収入、旅客施設使用料収入、物販・飲食収入が増収となったことから、営業収益は、前年度から156億円増の2,794億円となり、5期連続の増収、民営化以降の最高値を更新した。

一方、諸物価高騰や需要拡大に対応した施設運営費および老朽化設備の修繕・更新費用などの増加により営業費用は増加した。この結果、営業利益は前年度比2億円増の425億円、親会社株主に帰属する当期純利益は、固定資産除却損などの発生により、前年度比80億円減の270億円となった。

■ 2026年度連結業績予想

航空機発着回数は、国際情勢や経済動向の先行きに不透明感があるものの、国際線旅客便における底堅いインバウンド需要の継続や、国際貨物便の堅調な伸び、国内線の増便を想定していることから、全体として25.5万回となる見込み。航空旅客数は、足元での高水準な搭乗率の継続を想定していることから、4,280万人を見込んでいる。

この結果、営業収益は6期連続で増収となり、過去最高となるものの、諸物価高騰や需要拡大に対応した施設運営費および老朽化設備の修繕・更新費用の増加などにより、営業利益、経常利益、親会社株主に帰属する当期純利益は2025年度比で減益を見込んでいる。

● 航空取扱量

区分	2024年度	2025年度	増減	%	2026年度
	A	B	B-A	B/A×100	見通し
航空機発着回数(万回)	24.5	25.4	0.8	103.5	25.5
国際線	19.5	20.5	1.0	105.3	20.6
国内線	4.9	4.8	△0.1	96.6	4.9
航空旅客数(万人)	4,077	4,258	181	104.5	4,280
国際線	3,337	3,539	201	106.0	3,560
国内線	739	719	△20	97.3	720
国際航空貨物量(万t)	196	206	9	104.8	209
給油量(万kl)	339	356	17	105.0	370

※単位未満は切り捨てて表示

土屋伸一 財務部長より

好調な訪日インバウンド需要を背景として、弊社を取り巻く事業環境は堅調に推移しており、航空需要や空港内店舗における消費の拡大を着実に取り込んでおります。燃料価格の高騰や国際情勢の変動など、先行きには不透明な要素も残されておりますが、安全・安心な

空港運営を着実に継続しつつ、こうした環境変化を的確に捉えながら、将来の成長を見据え、「成田空港第2の開港プロジェクト」の遂行に向けた経営基盤の強化を着実に進めてまいります。

セグメント別損益の状況

■ 空港運営事業	営業収益は、国際線においてアジア、北米路線を中心とした旅客便の新規就航や増便もあり好調に推移した結果、前年度比90億円増収の1,163億円。営業費用は、人件費や諸物価高騰に伴う施設維持管理コストの増加により、前年度比122億円の増加。結果、営業損益は、前年度比24億円の減益となり、116億円の損失。
■ リテール事業	営業収益は、国際線旅客数が前年度を上回ったことに加え、新たな需要創出を目的とした新規出店が売上に寄与し、物販・飲食収入、構内営業料収入が増収となり、前年度比32億円増収の1,268億円。空港内店舗売上高は2,022億円と3年連続で最高値を更新。営業費用は、商品仕入原価および人件費などの増加により、前年度比23億円の増加。結果、営業利益は、前年度比8億円増益の413億円。
■ 施設貸付事業	営業収益は、第8貨物ビル供用開始(2024年10月)などにより、前年度比15億円の増収。営業費用は、人件費や諸物価高騰に伴う施設維持管理コストの増加により、前年度比17億円増加。結果、営業利益は、前年度比1億円減益の102億円。
■ 鉄道事業	営業収益は、成田高速鉄道アクセス線の線路使用料改定(2025年度から)により、前年度比18億円の増収。結果、営業利益は、前年度比19億円増益の26億円。

● セグメント別連結決算および業績予想 (単位:億円)

科目	2024年度	2025年度	増減	%	2026年度
	A	B	B-A	B/A×100	予想
営業収益 ※1	2,637	2,794	156	105.9	2,814
空港運営事業	1,072	1,163	90	108.4	1,199
リテール事業	1,235	1,268	32	102.6	1,242
施設貸付事業	299	314	15	105.1	324
鉄道事業	29	48	18	161.9	48
営業費用	2,214	2,369	154	107.0	2,559
営業利益	422	425	2	100.6	255
空港運営事業	△91	△116	△24	-	△239
リテール事業	405	413	8	102.0	383
施設貸付事業	103	102	△1	98.9	90
鉄道事業	6	26	19	395.1	25
経常利益	404	397	△7	98.2	207
当期純利益 ※2	351	270	△80	77.0	129

※1 外部顧客への売上高 ※2 親会社株主に帰属する当期純利益
※単位未満は切り捨てて表示

先生に伺いました

【今回お聞きしたいこと】
「成田空港の更なる機能強化」にあたり
地域との関係上、大切なことは？

航空機発着回数や空港スタッフの増加などが見込まれる「更なる機能強化」を進めていくなか、成田空港周辺地域に経済効果を波及させ、一体となって発展していくために必要なこととは。城西国際大学経営情報学部七井誠一郎教授に伺いました。

地域経済の拠点でもある成田空港が、周辺地域とともに持続的に発展し、機能強化を進めるにあたっての姿勢を教えてください。

NAA 地域共生部
大塚 雅希さん

今こそ重要な
グローバルマネジメント発想

成田空港は航空機を単に発着させる「空港機能」のみならず、地域社会に大きな影響を与える「経済圏の中核」としての役割を担っている。こうした状況を考える上で重要になるのが、国際経営論でいう「グローバルマネジメント」の発想である。それは「世界的視野」と「地域への配慮」を両立させる経営を意味する。この考え方とともに「Think globally, Act locally」の重要性が説かれることも多い。国際情勢が不透明な時代だからこそ、このグローバルマネジメントマインドを日本最大の国際空港である成田空港のステークホルダーの方たちに提案したい。

現在、世界40カ国101都市に就航している成田空港は、世界中の人々が利用する多様性に溢れたグローバルな空間を提供している※1。成田空港で働く人は約3万6千人に達しており、空港周辺自治体の人口規模に比べても総じて大きく、一日あたりの航空旅客数は11.5万人に上る※2。こうしたデータからも、空港は巨大な労働集約型産業であり、

単一自治体の人口規模を超える経済圏を形成していることが分かる。国際経営論では、こうした企業や巨大インフラが行政単位を超えて経済や社会へ影響力を持つ現象も分析対象となる。だからこそ、先入観や固定観念にとらわれない柔軟な視点や発想の転換が求められる。

関わるすべての人が
マインドの「革新」と「深化」を

「更なる機能強化」により工事が進むC滑走路運用時には、空港内で働く人がさらに3万人増え、7万人規模に達することが期待できるという。これに関連して筆者は山武市からの委託を受け、近隣の高校生を対象に成田空港での就労イメージについてヒアリングしたことがある※3。人は良い話より悪い話の方を強く記憶する傾向があり、これを「ネガティブバイアス」と言う。高校生たちは、空港で働く家族や知人から国際的で華やかな職場の話とともに、空港を支える仕事の大変さや苦勞についても聞いていた。そのためか将来的に空港での就労は考えにくいと話す生徒が実に多かったのである。これは空港で働く人たちが身近にいる周辺地域の特性と言える。

空港の「更なる機能強化」と周辺地域の「生活の質向上」の両立を目指すために、
グローバルとローカルの複眼思考でのマネジメントが必要でしょう

答えてくれた先生は —— 七井 誠一郎 さん
千葉県千葉市生まれ。城西国際大学経営情報学部教授。国際基督教大学大学院行政学研究科、同大社会科学研究所助手などを経て現在に至る。専門は国際経営論、HRM。現在、「成田空港周辺企業の人的資源管理の実態調査」(科研費 25K05266)を継続中。



今後、空港の「更なる機能強化」が進めば進むほど、その周辺では騒音や交通量増加など生活環境への負荷は増していく。空港の「更なる機能強化」と「生活の質向上」をトレードオフすることなく、その両立を目指すのが成田空港のあるべき姿だろう。そのためにも、開港計画から現在に至るまで紆余曲折のあった空港だからこそ、関わるすべての人がグローバルとローカルの複眼思考を実装しマネジメントしていく、マインドの「革新」や「深化」が必要ではないだろうか。

※1 <https://www.narita-airport.jp/ja/discover/citylist/> (2026年5月1日確認)
※2 成田国際空港振興協会(2025)『2025成田空港ハンドブック』並びにNAAホームページ『運用状況1-12月』より
※3 『成田国際空港周辺地域就業環境調査一令和2年度空港周辺企業の実態調査一』(2021年、山武市)

成田産ぶどうを使ったワインを 空港から世界へ

空港で働くスタッフの食事環境を向上させるため、NAAの有志メンバーが外部企業や周辺農家の方と協力しながらさまざまな活動を行っているプロジェクト「フードラボNRT」。その活動の一つが騒音対策用地※1を活用したワイン用ぶどう作りだ。今夏収穫を迎えるぶどう作りと今後の展望について、株式会社KIDS HOLDINGSの井戸氏、NAAの樋口氏に伺った。

荒れた耕作放棄地を整備し 独自の手法でぶどうを栽培

樋口：普段は旅客ターミナル部施設貸付営業グループの業務を担当していますが、その業務とは別に2022年のフードラボNRT立ち上げ時から参画し、プロジェクトの運営管理を行っています。空港スタッフは約4万人在籍していますが、コロナ禍で温かい食事をとれる食堂や弁当販売所が減ってしまったため、食事環境を少しでも改善したいと思ったのが発端です。2023年にNAA本社ビルの食堂で作った弁当を販売し始め、当初は1日100食、販売場所も食堂の1カ所のみでしたが、現在は1日600食、約10カ所にまで増えました。その弁当の具材に空港周辺で育てた野菜を使う“地産地消”にチャレンジしたいと考え、2024年から騒音対策用地で野菜栽培を始め、同時に挑戦しているのがぶどう栽培です。栽培は食堂の運営企業の親会社であるKIDS HOLDINGSさんが担ってくださっていて、分散した用地の一体化、荒れた田畑の農地復元、ぶどう栽培のための投資などの取り組みも進めてくださっています。

井戸：騒音対策用地は長年耕作が放棄されてきた土地で、そこをヘビやハチの被害に遭いながらも、重機や草刈り機などを使って約半年かけて整備したんです。当該用地では、根が伸びる範囲をポットのなかだけに狭める「根域制限栽培」により、新たな製品の生産に取り組むこととしました。栽培作物については、成田周辺に競合がおらず、近年ワイン需要も高まっているぶどうを選びました。弊社独自の根域制限栽培技術は実用新案登録していて、灌水や施肥の量やタイミングを調整できるため、通常の1.5～3倍の収穫量が見込め、かつ果実の品質も高めることができます。ポット内の土は、水はけの良い土を最適な比率で調合したものを使用し、成田の気候に合う品種を選定するため20種類以上の苗を育てているところです。



昨年植えた木にすくすく育っている“ぶどうの赤ちゃん”

樋口：KIDS HOLDINGSさんは、土の調合割合やポットの大きさ・素材など最適なものを探すべく、実験しながら根域制限栽培を進化させてくださっています。今夏には初収穫できる予定で、醸造設備も年内に施工し、早ければ来年春頃に試作ワインができる見込みと聞いています。こうした提供までを見据えたぶどう生産が評価され、KIDS HOLDINGSさんは3月に農林水産省の「優良外食産業表彰」の国産食材利用推進部門で農林水産大臣賞を受賞されました。

井戸：数ある企業のなかから弊社を選んでいただいて、率直にうれしかったですね。日本の農業は高齢化などさまざまな課題を抱えていますが、それを提携先に委託するのではなく、自ら1次産業の課題を解決しつつ6次産業※2につなげていくのが弊社の使命。そこを評価してくださったことは今後の励みになります。



NAA プロジェクトオーナー制度
フードラボNRT

樋口 翔一さん（旅客ターミナル部
施設貸付営業グループ）

株式会社KIDS HOLDINGS
代表取締役社長

井戸 勝さん

騒音対策用地から成田ブランドを

樋口：4月14日には200本のぶどう苗の植付け作業を実施しました。植え終わった畑を見て、数年後にはここがぶどう畑になることを想像し、期待感と同時にお客さまへ提供する方法や場所などを具体的に考えて進めていかなければという責任を感じましたね。

井戸：今はまだ栽培に最適な方程式を模索中ですが、4～5年後には安定的かつ安全な品質で大量生産できる体制にし、空港機能を使って輸出したり旅行者に土産として持ち帰ってもらったりと世界に羽ばたくワインを造りたいと考えています。私は成田在住ですが成田ならではの産品が少ないと感じていて、成田で生み出された成田ブランドをつくれたら空港や地域の人にとってベストじゃないかと。そのためにも栽培・醸造技術を地域の人に伝えてコミュニティをつくり、ぜひ「成田ワインバレー」を実現させたいですね。

樋口：NAAとしてはまだ相当数の騒音対策用地の未利用地がありますので、NAAと協業先が連携し一帯で活用することで、解決の可能性を示したいと考えています。個人的には屋上がぶどう畑になっている空港が海外にあるので、成田空港にぶどうの栽培・醸造・試飲もできる機能が将来的につくれたらいいと思います。

騒音対策用地の活用はほかにも…！

成田空港周辺の騒音対策用地の活用として、NAAではSAFの原料候補の一つである「スイートソルガム※3」の栽培実証を行っている。将来的には栽培を拡大し、SAFの製造から使用までを地域内で完結させる地産地消モデルを構築することで、脱炭素と農業振興を目指す。



- ※1 航空機の騒音による生活環境への影響を防ぐために、NAAが所有している土地
- ※2 農林漁業者（1次産業）が、生産した農林水産物を自ら加工（2次産業）し、流通・販売（3次産業）までを手掛けること
- ※3 乾燥、高温に強いイネ科の農作物。なかでも茎に糖を蓄積する品種群のこと

